

原著論文

～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～

栃木県から発見されたオカメワラジムシ属の一新種

布村 昇

富山市科学文化センター

栃木県小山市の土壌から発見されたワラジムシの同定依頼があり、解剖して比較研究したところ、新種であることが判明し、*Exalloniscus tuberculatus* (和名：ハリダシオカメワラジムシ) として記載した。本種はオカメワラジムシ *Exalloniscus cortii* とは (1) 雄第 1 腹肢内肢先端付近に複雑な突起を持つこと、(2) 雄第 2 腹肢内肢が短いこと (3) 頭部の形態、(4) 腹尾節後端の形態、(5) 退化した目、(6) 胸脚状に 3 分岐した剛毛の存在などのことにより区別される。なお、本種は日本での *Exalloniscus* 属の 3 番目の種類である。

～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～

霞ヶ浦から発見されたスウミナナフシの一新種

布村 昇

富山市科学文化センター

萩野 裕朗

国際航業株式会社

〒102-0075 東京都千代田区三番町 5

霞ヶ浦で発見されたウミナナフシの同定依頼があり、調査したところ、新種であることが判明し、フタマタスナウミナナフシ *Cyathura furcata* として記載した。本種は熊本県緑川河口から報告されている *Cyathura higoensis* と類似するが (1) 雄第 2 腹肢内肢の交尾針先端の形態、特に掌状の構造のないこと、(2) 目がはっきりした個眼からなること (3) 胸脚剛毛が少ないこと、(4) 顎脚がより太く、剛毛が少ないこと (5) 第 1 触角が太いこと、(6) 第 2 触角の先端の節が明瞭であることなどによって区別される。

本新種は福岡県室見川から報告されスナウミナナフシ *Cyathura muromiensis* と類似するが、(1) 雄の第 2 触角内肢の先端が二股に分岐していること、(2) 各胸肢に、より長い剛毛が生えていること、特に長節外縁 (3) 第 1 小顎先端 (4) 顎脚内壁に (5) 大顎鬚 (6) 雄第 1 胸肢腕節内面にかなり大きな突起があること等で区別される。模式標本は富山市科学文化センターで保管され、副模式標本は富山市科学文化センターならびに千葉県立中央博物館において保管される。

地方のいくつかの湖沼に出現する。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

立山亜高山域弥陀が原におけるハナバチ相の生態的調査

根来 尚
富山市科学文化センター

1995年に富山県東部、立山弥陀が原において、ハナバチ相の生態的調査を行った。その結果、5科7属28種1256個体のハナバチが得られた。*Lasioglossum*属が種数(9種)・個体数(約60%)ともに最も多く、次いで個体数では*Bombus*属(約30%)、種数では*Andrena*属(7種)が続く。*Lasioglossum proburematicum*(約50%)が最も多かった。

ハナバチの活動は6月から10月の間であり、盛夏と秋の2つピークが認められる。種類数・個体数ともに、*Lasioglossum*属は7月下旬と10月上旬にピークがあり、*Bombus*属は種類数では全般的に変動は少なく、個体数では8月9月上旬に多くなる。*Andrena*属では7月下旬に多い。

ハナバチの訪花をうけた植物は17科45種である。最も多いのはキク科植物で全採集ハナバチ個体数の約40%が得られ、ツツジ科、ユリ科、バラ科・リンドウ科と続く。中でもミヤマアキノキリンソウが最も多く、オオコメツツジ、ミヤマコウゾリナが続く。

*Bombus*属ではツツジ科への訪花が主であり、*Lasioglossum*属ではキク科への訪花が多いが訪花対象は広い。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

富山県で絶滅した大型動物(哺乳類・鳥類)の記録 IV 江戸時代中期の越中におけるトキの放鳥とその後の 生息状況について

南部久男
富山市科学文化センター

富山県で絶滅あるいは見られなくなった動物(カワウソ、イノシシ、ニホンジカ等)の過去の生息状況はすでに報告した(南部,1999)。今回、越中の古文書<富山県小矢部市の加茂家文書、過眼録(笹島,1926)等>を調査し、江戸中期の越中におけるトキの放鳥やその後の生息状況についていくつかの知見が得られた。1)1636年に現在の富山県西部の小矢部川流域9箇所(現在の滋賀県)から取寄せられたトキが100羽が放鳥され定着し、その後増え、150年間は放鳥地周辺に定着していた。2)江戸中期には、越中の中央部から西部の平地に

広く生息していた。3) 開墾等の影響で、江戸後期前半(1700年代後半～1800年代前半)にはトキの生息地の環境は次第に悪くなっていった。4) 放鳥の目的は加賀藩の矢羽作製のためと考えられる。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

富山県における水生蘚苔類の生態的知見

坂井奈緒子

富山市科学文化センター

富山県内のミズゴケ科を除く水生蘚苔類の分布を調査した。その結果、蘚綱8科19種、苔綱8科9種が見つかった。蘚苔類は小中河川、用水、流路溝、湧水、水田で確認され、大きな河川では見つけられなかった。

数種の蘚苔類では、分布が標高で制限されていることがわかった。水環境をみると、測定したすべての地点のpHはほぼ中性で、電気伝導度は23～288 μ S/cmであった。生育環境の水流に湧水が入っていると思われる地点が少なくなく、多くの蘚苔類は安定した水温で生育していると考えられた。しかし例外として、水田の止水環境で浮遊するイチョウウキゴケ(*Ricciocarpos natans*)は1日の温度変化が大きい環境で生育すると予想された。生育基物はコンクリート壁面がもっとも多く、次に転石が多かった。改修されたコンクリート水路は蘚苔類の良い生育場所になっていたが、改修によってクロカワゴケ(*Fontinalis antipyretica*)を見つけれなかった地点があった。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

短 報

～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～

富山市に出現したオオミスジコウガイビル

布村昇
富山市科学文化センター

1999年7月全長が1mにもなる扁平なひも状の動物が出現した。これは従来富山県から見つかった記録の無い扁形動物渦虫綱のオオミスジコウガイビルである。富山市では各地に出現したのでその状況を記録したが、その後、8月以降は全く見つかっていない。

～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～

富山県石動中学校所蔵トキの剥製について

南部久男
富山市科学文化センター

トキは、コウノトリ目トキ科に属し、日本産のトキは佐渡トキ保護センターに1羽が飼育されているに過ぎない。今回小矢部市の石動中学校に保管してある剥製の状態等を調査した。剥製は朝鮮産で、島津製作所標本部（現在の京都科学標本株式会社の前身）によって1943年（昭和19年）以前に製作されたと推測される。剥製の状態は羽の離脱や虫食いはほとんどみられず、比較的良好であった。剥製は終戦後まもなく薬局を営んでいた荒木正芳氏が骨董品店で購入したものを昭和26年11月24日に石動中学校に寄贈されたものである。

～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～

富山湾氷見市の海岸に漂着したオットセイについて

南部久男¹⁾、田島木綿子²⁾、荻野みちる²⁾、倉持利明²⁾、山田格²⁾、田中豊¹⁾
富山市科学文化センター¹⁾、国立科学博物館動物研究部²⁾

オットセイは、アシカ科に属し、太平洋北部、ベーリング海、そしてオホー

ツク海に広く分布し、日本近海には冬から春の非繁殖期に三陸沖や日本海に索餌回遊してくる。今回、富山湾でははじめてと思われる漂着が見られたので報告した。オットセイの死亡個体は、1999年5月8日に、氷見市海浜植物園の瀧口景子氏によって同市島尾松田江浜で波打ち際で発見された。全長 89.3 cm、体重 9,120 g のオスで、2歳と推定された。かなり腐乱し、皮下脂肪は認められず、非常にやせた個体であった。内臓は腐敗がはげしく、胃内容物はイカ類の顎器のみであった。

～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～

富山県新記録の植物 XIII

太田道人
富山市科学文化センター

富山県の植物相で未記録であったもの5種を、証拠標本を引用して記録した。記録された植物は、次のとおり。

タチモ（アリノトウグサ科） 福岡町安居寺筵田池から
サデクサ（タデ科） 小杉町綿打池池から
シンミズヒキ（タデ科） 大山町大川寺などから
コウキクサ（ウキクサ） 富山県魚津市木下新などから
ヒメミソハギ（ミソハギ科） 福岡町荒屋敷 小矢部川河川敷などから

～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～

富山県フロラに追加される植物 II

石須 秀知
魚津埋没林博物館
〒937-0067 富山県魚津市釈迦堂 814

富山県の植物相で未記録であったイトトリゲモを標本を引用して記録した。
イトトリゲモ（イバラモ科）
砺波市頼成の森水生植物園および小矢部市鷺島クロスランドおやべの池の2ヶ所から。

～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～